

Title	Effects of Work-Related Factors and Work-Family Conflict on Depression among Japanese Working Women Living with Young Children
Author(s)	瀬戸, 昌子
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46197
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	瀬戸 (西村) 昌子
博士の専攻分野の名称	博士 (医学)
学位記番号	第 19916 号
学位授与年月日	平成 18 年 2 月 20 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 医学系研究科社会医学専攻
学位論文名	Effects of Work-Related Factors and Work-Family Conflict on Depression among Japanese Working Women Living with Young Children (乳幼児を育てる日本の就労女性において仕事関連要因と仕事家庭葛藤が抑うつ症状に与える影響)
論文審査委員	(主査) 教授 森本 兼曩 (副査) 教授 武田 雅俊 教授 大菌 恵一

論文内容の要旨

〔 目 的 〕

我が国では、近年、結婚、出産、育児を理由に退職する女性が減り、子育て中も就労する女性が増加している。勤労者のメンタルヘルスを考える上で抑うつは大きな問題であるが、子育て中の女性の場合は、子供への否定的な接し方や反応の乏しさをもたらす、子供の将来の知的発達の遅れや問題行動にも影響するため、非常に重要な問題である。諸外国の先行研究では、就労は、女性の自尊感情を高め社会ネットワークを増やすことでメンタルヘルスに好影響をもたらすが、子育て中は仕事家庭両役割をこなさなくてはならないため、好影響が帳消しになるとされてきた。女性の仕事に関連したストレス、ストレス緩和因子として様々な要因が挙げられてきたが、日本では、このライフステージの就労女性を対象として職場ストレスや仕事家庭両役割に由来する葛藤と抑うつ症状と関連を調べた調査はなかった。そこで、本研究では、乳幼児を育てる日本の就労女性において、種々の仕事関連要因、仕事家庭葛藤と抑うつ症状との関連を調べた。

〔 方法ならびに成績 〕

2001 年関西の某大都市の私立保育所 (8 箇所) に乳幼児を通所させている女性を対象に仕事家庭環境、抑うつ症状についての自記式調査を行った。調査用紙には、研究目的と共に、参加は自由意志によること、匿名調査であること、結果の公表時にはプライバシーが保護されることを記載した。保護者全員 (n=871) に調査用紙を配布し、688 名分を回収後、不完全回答 (n=43)、母親以外による回答 (n=9)、非就労、産休、就労有無不詳 (n=73)、週労働時間不詳 (n=4)、週労働時間が 20 時間未満 (n=58) の回答者を除き、週 20 時間以上働く母親 (n=501) のデータを解析した。仕事関連要因として、仕事量、仕事の責任、技術・能力の発揮度、個人収入への満足度、仕事スケジュールの融通のききやすさ、雇用不安、職場の人間関係を、また、仕事家庭葛藤として、職場と家庭両方の役割を果たす上で葛藤を感じる頻度を、各 4 段階で尋ねた。抑うつ症状は、Center for Epidemiologic Studies Depression Scale (CES-D) (Radloff, L., 1977) で測定した。

仕事関連要因、仕事家庭葛藤と抑うつ症状の関連は、まず、Spearman 相関係数を調べた。さらに、階層的重回帰分析を用いて分析し、第 1 段階は、年齢、教育歴、パートナー有無という属性と抑うつ症状の関連を調べ、第 2 段階

は、仕事関連要因を、第3段階ではさらに仕事家庭葛藤を従属変数として加えて、CES-D得点との関連を調べた。仕事量と責任は相関関係が強いため、2つを合計して、仕事負荷という一つの変数とした。調査時には週仕事時間、就労形態、職業分類も尋ねたが、属性をコントロールするといずれの因子も抑うつ症状との有意な関連を認めなかったため、最終の重回帰分析には使用しなかった。

CES-Dの平均得点は16.1 (SD 9.8)であった。45.1%の女性がカットオフポイントである16点以上となり、抑うつ症状を持つことが示唆された。各職場関連要因とCES-D得点の相関 (Spearman's ρ) を調べると、技術・能力の発揮しにくさ、個人収入への不満足、仕事のスケジュールの融通の効かなさ、雇用不安、職場の好ましくない人間関係を認める程、CES-D得点が高いとの結果が得られた ($p < 0.05$)。また、仕事家庭葛藤が高い程、CES-D得点が有意に高かった。重回帰分析では、第1段階では、教育歴、パートナーの有無、個人収入という3つの独立変数によるR2乗は7.2であった。第2段階で職場関連要因を加えてR2乗は12.3%増加し、要因の中では、職場の好ましくない人間関係、雇用不安、技術・能力の発揮しにくさが有意に抑うつ度の高さに関連していた ($p < 0.05$)。第3段階で、仕事家庭葛藤を加えるとR2乗はさらに10.2%増加した。

[総 括]

保育所に子供を預けている女性では、抑うつ症状を有する率が高く、仕事に関連した要因の中では、仕事の負荷自体ではなく、職場人間関係不良、雇用不安、技術・能力の発揮しにくさが抑うつ症状と有意に関連していた。また、仕事と家庭両役割を果たす上で生じる葛藤も抑うつ症状との関連を認めた。本研究の対象は、半数近くがパート・アルバイトなどの非正規従業員であり、収入への満足度も低く、能力を発揮できないと考える者も多かった。子育て中の就労女性の特徴をつかみ、適切なサポートシステムを作っていくことが重要と考える。

論文審査の結果の要旨

本論文は、1人以上の乳幼児を育てながら就労する女性を対象として行った調査に基づいて、様々な社会的属性、仕事の特徴、職場に関連したストレス、職場と家庭両役割の間に生じた葛藤を記載し、CES-Dという日本人においても妥当性信頼性の確立した抑うつ尺度との関連を調べた結果をまとめたものである。仕事家庭葛藤が抑うつ症状と関連することもこの対象においては日本で初めて示された。

日本では、職域調査や地域住民調査では、少しずつ女性の就労者や母親についてのデータが得られてきたが、保育所の親という、子育てと仕事ストレスに最も直面しているグループを把握するために貴重なデータと考えられる。質問項目にオリジナルが多く、女性の生活面のサポートを解析に加えていないという短所はあるが、少子化に悩む日本での、子育て支援のための基礎研究としては大変重要と考えられ、学位に値するものと認める。